



「静観」病院」…。およそ楽しい類の対談には相応しくない言葉であっても、この二人にかかれば何のその。当たり前のように会場には笑いが溢れたのである

お 馴染みの顔と会話を取っかかりに、そこが開かれた場所であることを伝えようとする西本願寺とその宿坊・聞法会館。宿坊と言うにはあまりに立派な建物だが、自らの存在理由を伝える一手を打った。それがこの、関西ではつとにお馴染みの二人の対談であった。



桂南光 Katsura Nanko

'51年大阪府生まれ。本名・森本良造。'70年、桂小米（故・枝雀）に入門。桂へかこの芸名で親しまれる。'93年三代目桂南光襲名。翌年には上方お笑い大賞受賞。関西テレビの「痛快！エブリデイ」の司会などで活躍中。



キダ・タロー Kida Taro

'30年兵庫県生まれ。作曲家。放送番組のテーマ曲やCMソング・校歌・社歌・歌謡曲に至るまで、膨大な作曲活動の経歴を持つ。朝日放送の「探偵！ナイトスクープ」など、テレビにも多数出演中。「浪花のモーザルト」の異名はあまりにも有名。

世界文化遺産という名の、パブリックスペースにて。

ここはテレビ局ではなく、そしてラジオ局でもなく、対談はこんな調子で延々と続く。関西にお住まいで、人並みにテレビを観る方ならばお馴染みの二人。ここはテレビ局でもなければラジオ局でもない。立派な規模ではあるが、寺院の宿坊である。何故宿坊？という純粋な疑問である。

きっかけは、この宿坊の主・西本願寺からの、キダ・タロー氏による書籍の発刊。著名人26人とキダ氏の対談をまとめたもので、右記の「これが私の生きる道」というのがそのタイトルである。今回のトークショーのキダ氏の相方は、同書に収録されたゲストの中から桂南光氏に白羽の矢が立った。広報担当の島地さんは言う。「主催する私たちが「本よりも直接聴きたい」と。出版した私どもがこれと言ってダメなんですけど（笑）」。微笑ましい内部事情のエピソードよりも、その本旨の中に伝えるべきことがある。

南光 キダ先生に初めて逢ったのは30年ほど前でしやるか？

キダ もっと前でしょう。

南光 その時からイヤミたらしい人でしたわ（笑）

南光 （中略）

南光 ウチは無宗教ですから仏壇がないのと、師匠（故・桂枝雀）の写真とか、河島英吾さんとか（笑）福亭、松鶴師匠の写真とか2階の廊下に置いてあるんですよ。朝起きたら前を通りますから「おはようございます」とね。けど先生が亡くなったら我々がお墓たてます。

キダ 要らんなあ。

南光 言うてもその時は先生もう亡くなってますから何も言えませんが（笑）

南光 「これが私の生きる道」ちこて死んだ後どうなるかの話ですよんか（笑）…

今回は有名人を招聘するというものであったが、ここ近所の趣味の会でも良いんです。自然発生のニコニコエーションの場となっていてくれれば、もちろん、人をタシにして商売をするような、金銭的なメリットは思わない。

ちなみに今回のトークショーへの参加者には、小学生から90歳代の方までいたという。「日本の文化って、言葉遊びひとつとっても楽しいですね。島地さんはしみじみと言う。文化に限られた人のもではないように、寺院も限られた人のもではない。宗教や教義に縛られているならば、文頭の桂南光氏のコメントなどタブー以外の何物でもなからう。それが許される事が何よりも「宗教・教義を超えた存在たるべし」という姿勢を物語る。

世界遺産という名のパブリックスペースに足を運べる事は、幸せなことではないか。同会館がその取っかかりとなる。そのまたその取っかかりに一肌脱いだのが、今回のこのお二人と言えるだろう。

「ある種の人」以外も入って良いところ。

西本願寺と言えは世界文化遺産である。それを守り続けてきた人に敬意を払う必要もある。「でも「ある種の人しか用がないところ」と思われたくないんです。観光資源である前に人が集まる場所でありたい。それが暇つぶしでも良いんです」。

寺院と聞くと、誰しもが宗教的意義や教義の意味を考える。だが神社仏閣にはいくつかの性格がある。例えば「広域避難場所」に寺院が指定されれば？そこには宗派・教義以前の意味がある。

「現在は隣近所に誰が住んでいるかも知らない、人と人との接点がない疲弊した時代だと言われます。でも人の体温を感じれば、疲れも克服できるのではないかと思っています」。その発想が宗教や宗派、教義に繋がるといっわけでもない。それらを超えた、むしろ道徳よりも根幹的な人としてのありようを言うのである。

世界文化遺産に、足を運べる幸せ。